

「津田の^{ぼに}盆踊り」における自由な乱舞とぞめきリズム

—「阿波踊り」との比較分析—

小林 敦子 (明治大学 情報コミュニケーション研究科 博士課程前期)

Free-style Dancing and *Zomeki* Rhythm in *Tsudanoboni odori*

—A Comparative Study to *Awa odori*—

Atsuko KOBAYASHI (Graduate School of Information and Communication at Meiji University)

Abstract

Tsudanoboni odori is a dance performed in the Tsuda district in Tokushima City by the *Tsudanoboni odori* preservation group. It consists of a ceremony for mourning the dead who were killed in wrecks at sea and a free-style dancing. The free-style dancing is said to be an original form of *Awa odori*. This report is to clarify nature of the “free-style” dancing of *Tsudanoboni odori* from a perspective of its *zomeki* rhythm by comparing its *shamisen* (a Japanese classical 3-string instrument) music and foot steps. The word *zomeki* expresses the characteristic 2-beat exhilarating rhythm, is shared by both of *Tsudanoboni odori* and *Awa odori*, and is said to be embodied the most by *shamisen* music. The methodology involves researching the literature and conducting field research by observing the participants. My philosophical standpoint for social research is interpretivist. It has been found that there are several simple standard foot steps in *Tsudanoboni odori*; however, dancers are not restricted to them, and can enjoy and freely deviate from the 2-beat *zomeki* rhythm.

Key Words: *Tsudanoboni odori*, *Awa odori*, *zomeki* rhythm, free-style dance

1. 研究の背景と目的

「津田の盆踊り」¹は、徳島市東部の紀伊水道に面した「津田地区」²に伝わる盆踊りである。昭和30年代後半に衰退したが、昭和61年に「津田の盆踊り保存会」(以下「保存会」とする)が結成され、現在、盆期間や各種イベントで踊られている。徳島市には日本三大盆踊りの一つである「阿波踊り」があり、年間130万人程を集客する重要な観光資源となっている。「津田の盆踊り」は「藩政期には城下の盆踊りの発生に大きな影響を与え、阿波踊りの原型とする説もある」[徳島県教育委員会 2007: 298]とされている。両者は、三味線で表される「ぞめき」と言われる「弾むリズム」に合わせた「弾む踊り」であること、踊りの隊形が練歩き(行進型)でありお囃子隊も一緒に随行すること、唄が都々逸風の「よしこの節」であること、が共通している。徳島県全体の盆踊りは、大きく分けるとこの市中のものと、その他在郷のものに分けられ

1) 「盆」は「ぼに」と読む。盂蘭盆会のことを徳島では「ぼに」という[橋本 1930: 54]。

2) 行政区分上は「津田・新浜地区」であるが、徳島市では一般に「津田地区」と言われていること、また本論の研究対象が「津田の盆踊り」であることから、本論では「津田地区」とする。

る³。在郷では神社の境内などでの輪踊りであり地域により多様であるが、例えば吉野川流域や撫養地方では、「浄瑠璃くずし」と言われる音頭で踊られていた⁴。このように「津田の盆踊り」は「阿波踊り」と同じルーツを保持し、県内の他の盆踊りとは異なる系統のものと考えられる。

しかし、この2つの盆踊りはその歴史的経緯に大きな相違がある。徳島市城下と津田地区は距離的には近いが、津田がかつて「陸の孤島」であったこと⁵、また住民の職業構成が相違していたこと⁶から、異なる文化圏であったためと思われる。現在の阿波踊りは、徳島城下の都市の盆踊りが、大正末期からの観光化の過程の中で変容および発展したものである。踊りの所作も、「踊りの振も一定せず自由奔放に踊る」[小寺 1941：327]とされていたものから、現在では連と呼ばれる踊りの団体内での統一性が大変重要視されている。これに対し、「津田の盆踊り」は城下の盆踊りが観光化される際にその範疇には組み込まれず、阿波踊りの隆盛に伴い一度衰退した。そして約20年後復活し「阿波踊り」イベントの一環として踊られている。踊りの所作は現在の「阿波踊り」とは対照的に、「阿波の方言で言うメンメヤチヤチ（各自が好きなように振舞うの意）」[檜 1989：35]、「自由闊達な踊り」[徳島出版 1992：25]、および「乱舞形式」[徳島県教育委員会 2007：298]とされている。

本論はこの「津田の盆踊り」の所作を「自由な乱舞」とし、それがどのようなものであるかを、説明することを目的とする。

2. 先行研究および研究方法

研究方法は、DVDを含む文献調査と以下のようなフィールドリサーチである⁷。

①2012.8.4 徳島市津田コミュニティセンターで行われた保存会主催の練習において、参与観察を行った。

②2012.8.4～8.6 「ぞめき渦の会」主宰の福島俊治氏（県内外の阿波踊り有名連の三味線師を20年以上多数指導）に3回にわたり、ぞめき三味線と「よしこの節」の教授を受けた。

③2012.11.25 保存会の会員の方の自宅にて、3人の会員の方に、保存会結成の経緯、踊り、唄、及び昔の津田の盆踊りや祭りや行事について、インタビューを実施した。

先行研究としては、「津田の盆踊り」[檜 1989]、および「津田の盆踊りにおける一丁廻り報告」[磯本 2011]があるが、踊りの所作に関する詳細な研究はない。

3) 「阿波の盆踊りは、大きく分けて、『村（在郷）の盆踊り』と『町（城下市中）の盆踊り』の二つの系統に分けられる」[高橋 2007：99]。

4) 郷村の盆踊りにおける「浄瑠璃くずし」は「二上り音頭」（音の高低による調子の一つであり、二の弦が「本調子」より高い）とも呼ばれ、「音頭出しが浄瑠璃のサワリの一部分を語り（謡い）、踊り子は伴奏の太棹の三味線のリズムに合わせて踊った」[高橋 2007：97]ものである。これに対し城下の盆踊りにおける「ぞめき」は、細棹三味線で「三下り」（三の弦が本調子より低い）で弾くものであり、「二上り音頭」とは異なる。

5) 「津田」は鎌倉時代の資料で「津田島」とされているように、もとは海中の孤島であり[磯部 1994：70, 76]、昭和初期に鉄筋コンクリート造の橋（「津田橋」および「津田小橋」）ができるまでは「陸の孤島」といわれていた[徳島市津田コミュニティ協議会 2013：18]。

6) 藩政期においては城下は侍屋敷および商家が中心であったのに対し、津田地区は藍や塩の積出港として栄え[磯部 1994：20]、また昭和30年頃までは漁師町でもあった[徳島市津田コミュニティ協議会 2013：14, 22]。

7) 補足として阿波踊りに関しても、新粋連（東京）、東京新のんき連（東京）、および飛鳥連（東京）の練習においての参与観察およびインタビューを実施した。

3. 「津田の盆踊り」の「阿波踊り」との比較分析の根拠

「津田の盆踊り」を「阿波踊り」と比較分析するにあたり、両者の特徴を表に示す。

表1 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」の比較

	津田の盆踊り	阿波踊り
踊り集団の隊形	練歩き・舞台での踊り	練歩き・舞台での踊り
踊りの種類	特にない	「男踊り」「女踊り」「女の男踊り」
集団内での隊形	フォーメーションを組むことはない	様々なフォーメーションを組む
お囃子のリズム	ぞめき（浮き立つような弾むリズム・2拍子・三味線で表現される）	
お囃子楽器	三味線・笛・鉦・締太鼓・大太鼓など	
唄	よしこの節（都々逸風）	
	唄の旋律が弾むリズムを表し、必ず歌われる・歌いながら踊る	唄の旋律はゆったりしており、ぞめきリズムとは異なる・歌われることは少ない
衣装	大漁旗から仕立てた浴衣・古風な浴衣や着物・法被・髷・髻・面など	浴衣・法被（連内で統一）
宗教性	精霊送り迎えの儀式あり ⁸	希薄
担い手	「津田の盆踊り保存会」約40名	連（数名～300）が全国に800～1000
地域性	徳島市津田地区に固有のもの	徳島市城下の盆踊り・全国に伝播
文化財指定	徳島県無形民俗文化財（平成14年）	指定なし

また両者の踊り手の年齢構成と履物の特徴を表2に示す。

表2 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」の踊り手の特徴

踊りの種類 指標	津田の盆踊り	阿波踊り		
		男踊り（男）	女踊り（女）	女の男踊り（女）
年齢	中高年の女性中心（男性は数名）	若年～高齢	中高生中心	若年～中年
履物	草履が大半である（基本的に自由）	足袋	下駄（爪先立ち）	足袋

8) かつて漁師町であった津田地区に伝わるとされるものであり、海難事故による遭難者を弔う儀式として、夫を亡くした妻役の女性が踊りの前に迎え火を炊き、「お父、お盆やけん、もんでこ〜い」（お父さん、お盆だから戻ってき）て）と言い、藁人形に精霊を迎え入れる所作をする。そして全員で「もんでこ〜い」と唱和し、お囃子と踊りが始まる構成となっている（筆者の参与観察より）。また、盆の最終日8月15日には一丁廻り（津田地区の町まちを踊りながら練り歩くこと）後、浜に行き「海に向かって送り火を焚き、供物を供え、その脇に藁人形を置き」「踊りの後、最後に藁人形が海に流され、踊りの一行はふり返らずに引き返す」という儀式を行っている〔磯本 2010：3〕。

表1で示されているように「津田の盆踊り」と「阿波踊り」では「ぞめき」リズムが共有されている。「津田の盆踊り」ではこの「ぞめき」が唄だけでも表現されており、三味線などのお囃子がなくとも、唄があれば「弾むリズム」が表現され、踊ることができる⁹。一方「阿波踊り」ではこの「ぞめき」は三味線を中心とするお囃子楽器のみで表現されており、リズムにおける「間（ま）」「タメ」が重要視され¹⁰、踊りの所作においてもこれを表現することが、特に「男踊り」の踊り手の目標とされることが多い。表3に「ぞめき」に関する両者の比較を示す。

表3 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」における「ぞめき」の比較

指標 \ 踊りの種類	津田の盆踊り	阿波踊り
ぞめきを表現するもの	唄・三味線などお囃子 (唄の旋律に弾みがある)	三味線などお囃子 (唄の旋律に弾みがない)
踊りとぞめきの関係	踊りの所作は「ぞめき」リズムの弾みを表す	
	踊りの所作において特に「間」「タメ」が重要視されることはない。	踊りの所作における「間」「タメ」が重要とされる。

このように「ぞめき」のとらえられ方に相違があるが、両者とも踊りの所作とぞめきリズムが密接な関係にあることがわかる。また表1から示されるように、両者とも踊りの形態は「練歩き」中心であり、持続的に前進する足運びが基本となっている。そこで、ぞめきリズムと足運びの所作に焦点を合わせ、「津田の盆踊り」を「阿波踊り」と比較分析する。

4. 結果および考察

4.1 ぞめきリズムと三味線の特徴

「ぞめき」とは「①さわぐこと。さわぎ。②うかれさわぐこと」(『広辞苑 第五版』)という意味である。近世後期の徳島城下の盂蘭盆会では、「ぞめき」「組踊り」「俄」の三様の踊りが併存していた。この内「組踊り」および「俄」は藩により度々禁止され次第に衰退し、残る「ぞめき」が変容・発展したものが現在の「阿波踊り」といわれている。

9) 保存会の会員によると、「唄が弾むので唄だけで踊れる」ということである。また、阿波踊りの唄では「弾まないのでもちょっと踊れない」とも言われる。

10) 「間」「タメ」の重要性は現在の阿波踊りに関する言説に多く見られる。例えば、有名連である娯茶平連の連長岡秀昭氏と「よしこの節」の功労者といわれる「お鯉さん」こと多田小余綾氏が、「阿波踊りで一番大切なことは『間(ま)』をとることだと話し合った」エピソードがある[阿波踊り雑誌「あわだま」編集部 2012: 33]。また、東京新のんき連踊り指導担当者(徳島市出身)も筆者のインタビューで、「一番大切なことは『間(ま)』をとること」と話している。観光ポスターのキャッチにも「二拍子の楽園 (2011年)」「無敵の二拍子 (2012年)」などのリズムを表す言葉が使用されており、リズムが重要視されていることがわかる。

お囃子楽器の中で最も「ぞめきリズム」を体現しているのが三味線である¹¹。そこで、「津田の盆踊り」および「阿波踊り」に共通の、三味線の基本的なフレーズを図1に示す。

楽譜/拍子		1		2	
口三味線		チャーン		リ	
三味線譜	3の弦	2	2	2	3
	2の弦	○	○	○	○
	1の弦	＝	スハ	＝	ス
五線譜					

○～開放弦 ○～2分の1拍 ○～4分の1拍 ○～8分の1拍 ●～休止
(タメ)

2, 3～指で弦を押さえる勘所 ス～バチで弦をすくう ハ～指で弦をはじく

図1 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」におけるお囃子三味線（ぞめきリズム）（実演時）
（「ぞめき渦の会」代表福島氏によるものを、筆者が1小節を2分割して表した）

福島氏によれば、1拍目および2拍目の前半と後半、すなわち口三味線でいうところの「チャーン」と「リレ」（1拍目）、および、「チャーン」と「リ」（2拍目）の間に十分な「間」「タメ」を作ることが、大切とされている¹²。ぞめき三味線の「弾み」に加え、この「間」「タメ」を踊りにおいても表現することが、現在の「阿波踊り」で大切とされている。一方、「津田の盆踊り」では「弾むリズムと弾む踊り」としてその特徴が語られるが、「間」「タメ」については特に言及されることはない。

4.2 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」におけるぞめきリズムと足運び

この2拍子のぞめきリズムと、「津田の盆踊り」および「阿波踊り」の足運びの関係を図2に示す（図2は紙面の都合により次頁に記載したため、次頁を参照されたい）。

図2から、「津田の盆踊り」および「阿波踊り」いずれにおいても、2拍子の「ぞめきリズム」の枠組みに添って、足運びが行われていることがわかる。この足運びを、同じ足を右・右あるいは左・左と2度続けて踏む「同側型」¹³かどうか、また1拍目に差し出す足のタイミングが拍の頭にくる「オンビート型」か拍の後半にくる「オフビート型」か、の2つの指標に従って分類したものが表4である。

11) 「三味線は、ぞめきの当て字に使われるほど。阿波踊りの軽妙で心地よい『ぞめき感』が、三味線の持ち味である。」とされる[南 2007: 52]。

12) 福島氏はこれを「言葉は悪いが蹴を引くような感じ」と表現している。筆者はこれを「フェイントをかけるような」ものとする。

13) これは吉川の研究による「ボンアシ」[吉川 1997: 606]に相当する。「津田の盆踊り」および「阿波踊り」のいずれにおいても、ボンアシ以外の足運びも見出される。

表4 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」における足運びに関する2つの指標による分類

指標		踊りの種類	津田の盆踊り	阿波踊り
(同側型) 同じ足を二度続けて踏む か否かによる分類	①同側型		B,D (1拍目を起点とする) A (2拍目を起点とする)	男踊り・女踊り
	②同側型ではない		C (1拍目を起点とする)	男踊り・女踊り
	③混合型		E (拍にとらわれない変則的な踊り)	お囃子緩急やフォーメーションにより①⇔②の間で変化する場合がある。
	集団内での統一性		統一性はなく個々人で自由であり、同一個人でも時により、同側型とそうでない場合がある。	連内では常に統一的であるが、男踊りでは比較的個々人の自由が許容される面がある
イミ ン グ による分類	①オンビート型		A, B, C	男踊り・女踊り
	②オフビート型		D	男踊り・女踊り
	③混合型		E (拍にとらわれない変則的な踊り)	お囃子の緩急やフォーメーションにより①⇔②の間で変化する場合がある。
	集団内での統一性		統一性はなく個々人で自由であり、同一個人でも時により、オンビート型の時とオフビート型の場合がある。	連内では常に統一的であるが、男踊りでは、比較的個々人の自由が許容される面がある。

「津田の盆踊り」および「阿波踊り」いずれにおいても、同側型でオンビート型の足運びが標準的なものと考えられる。これは、例数が多いことと、「阿波踊り」における観光客向けのパンフレットに書かれた踊り方が、同側型かつオンビート型であることによる¹⁴。

しかし、これは同側型でオンビート型以外は例外とされているわけではない。例えば「阿波踊り」の有名連であり娯茶平連の「男踊り」と「女踊り」では、1拍目の足はほとんど接地しないため、「同側型」でも「オンビート型」でもない。「男踊り」は能のすり足のような足運び¹⁵といわれており、「女踊り」では1拍目に遊脚が浮いたまま上下運動をする¹⁶。そして、これが「阿波踊り」における「三大正調」の一つともされている。「阿波踊り」においてはこのように、連ごとにある様式美が確立しており、お囃子の緩急やフォーメーションの組み方に影響されて足運びの所作が変化する場合にも、連内の統一感が保持される。この統一感が保持された状態で、「男踊り」における自由で即興的な所作が許容され、個々人が各々の「間」「タメ」を表すような所作を工夫していると言える。

14) 「津田の盆踊り」について書かれたものには、研究論文および観光用パンフレットいずれにおいても、踊り方は自由とされるのみで、足運びについてのきまりは書かれていない。また筆者が参与観察時に一緒に踊るさいにも、「1, 2, 1, 2に合わせて進めばよいから」とだけ指導された。

15) 筆者が飛鳥連（娯茶平連の姉妹連）の練習に参加した際には、「男踊り」において「い〜ち」と1拍目のカウントを2拍目の直前まで伸ばしながら足運びをする指導がされていた。これにより、1拍目と2拍目の接地がほとんど同時に行われ、1拍目の接地がほとんど消失しているため、結果的に同じ側の足を2度づつ踏む所作ではなくなり、「同側型」の範疇にはあてはまらない。また地面に足がねばりついたような独特の所作が生まれる。

16) 遊脚が腰と共に上下にバウンスする動きは、現在の「女踊り」では標準的な所作となっており、「自転車のペダルを踏むような」[星野紘・芳賀日出男 2006: 676]といわれる。

「女踊り」は優雅さを表現するものとされているが、特にこのゆったりしたバウンスと手先の細かな所作に表現されていると、筆者は考える。

津田の盆踊り						阿波踊り	
A		B	C	D	E	男踊り	女踊り
2							
1							
2							
1							

下から上に見る 津田の盆踊り						阿波踊り			
草履		足袋		阿波踊り(男踊り)		阿波踊り(女踊り)		下駄	
左右の足	足底接地	左右の足	足底接地	左右の足	足底接地	爪先接触	爪先接地	左右の足	爪先接触

表の見方：左右の足運びの1パターン分（2小節4拍分）を、下から上に記載したものである。「津田の盆踊り」のA～Dは個人の踊りを分析したものであり、「津田の盆踊り」の代表的な足運びである。Eはこの個人だけが行っている変則的な踊りである。一方「阿波踊り」は特定の個人の踊りを分析したものではなく、DVD資料内で紹介されている「男踊り」「女踊り」の映像および筆者の参与観察から分析したものである。↙は当該拍における足の移動を示す。

図2 「津田の盆踊り」および「阿波踊り」の足の動作とぞめきリズム

一方「津田の盆踊り」では、所作を揃えることにより集団としての統一感を出そうという姿勢はみられない¹⁷。同じ足を二度づつ踏んでいくかどうか、1拍目に差し出す足をオンビートにするかオフビートにするかは全く個人の自由にまかされている。各個人が2小節4拍を1パターンとする枠組みの中で、自由にリズムを表現していると言える。またEのように、このパターンを破り拍にとらわれない所作も許容されている。Eは足運びのタイミングが拍にとらわれないだけでなく、前の人を抜いたりまた戻ったりする変則的な動きである。ときおり体を大きく回転させながら進んだり戻ったりしており、図に示した以外にも様々なバリエーションで動いていく¹⁸。また「津田の盆踊り」では、同一個人でも時と場合により踊りの所作が変化することがある。このため、「その人らしい踊り」というものがありながらも、即興的な自由な踊りが許容されているといえる。

4.3 足運び以外の踊りの所作

足以外の踊りの所作、すなわち、体全体の上下動、肩関節の動き、遊脚の蹴り上げ具合、上肢の高さ、前腕の回旋、手指関節の屈伸などの動きの程度はさまざまであり、自由である。また、手足の動きのタイミングは、右足と右手、あるいは左足と左手の同側の手足が同時に前に出る所作、いわゆるナンバが標準である。

5. 結論

「津田の盆踊り」は、弾むリズムに合わせた弾むような所作の踊りであり、4拍を1パターンとして、1, 2, 1, 2という拍子に合わせて足を運び、手足のタイミングはナンバで進行するという標準的な所作がある。「ぞめきリズム」はこの所作の土台となっており、この点において「阿波踊り」と共通している。しかし「津田の盆踊り」では、4拍をどう使うかは個人にまかされており、自分の体をどの程度弾ませるか、手足をその弾みにどう載せるかも自由である。さらに、2拍子に合わせない変則的なリズムで踊ることも許容されている。また、現在の「阿波踊り」では連ごとに確立された様式の所作があり、いろいろなフォーメーションを組むことが標準となっている。そのためかなりの練習が必要とされているが、「津田の盆踊り」では特にトレーニングは必要とされていない。個人がその時どきにより、踊り方を変えることも可能である。集団としての統一性ではなく、個々人の即興的な動きが許容されていることが、「津田の盆踊り」の「自由な乱舞」といえる。

6. 今後の課題

本論では「足運び」と「ぞめきリズム」に焦点を合わせ阿波踊りとの比較分析を行ったが、「手の所作」もリズムを表したものであり、これについては今後の研究課題とする。

-
- 17) 保存会のある会員は、「ひとまねはやめとこな」という言葉で「津田の盆踊り」のコンセプトを表現している。踊りの所作においても衣装においても「揃える」ことが重要視されている現在の阿波踊りとは対照的である。
 - 18) 踊り手Eは60代男性で、以前「阿波踊り」の有名連で踊っていた経験があり、「男踊り」の所作の心得がある。しかし「津田の盆踊り」ではあえて、「特に拍に合わせず、ゆったり踊ろうと思った」と話しており、確立された様式とは異なる自分なりの表現をしようとしていることがわかる。

また、「津田の盆踊り」は「阿波踊り」の観光イベントの一環としても踊られているが、「阿波踊り」が観光化により踊りや衣装が統一されてきたのとは対照的に、踊りの所作や衣装は個々人で自由とされている。むしろ「統一せず自由である」ことが、観光化される以前の「阿波踊り」の原型性ともされ、その存在価値を保持していると考えられる。「津田の盆踊り」が「阿波踊り」に対してどのような位置づけにあるのかについても、今後の研究課題としたい。

引用文献

図書・論文等

- 阿波踊り情報誌「あわだま」編集部 2012「流儀伝承」 猿楽社
- 橋本亀一 1930「阿波の言葉：郷土研究」 出版社・発行人の記載なし
- 檜瑛司 1989「津田の盆踊り」『民俗芸能(70)』民俗芸能刊行委員会：34-39
- 星野紘・芳賀日出男 2006「日本の祭り文化事典」 社団法人全日本郷土芸能協会 東京書籍
- 磯部庄次郎 1994「津田・新浜風土記」 徳島県出版文化協会
- 磯本宏紀 2011「津田の盆踊りにおける一丁廻り報告」『徳島地域研究(9)』徳島地域文化研究会：16-21
- 吉川周平 1997「ボンアシー盆踊りにおける足の運びが意味すること」『体育の科学』Vol.47：606-609
- 小寺融吉 1941「郷土民謡舞踊辞典」 富山房
- 南和秀 2007「阿波踊りは美しい」 徳島出版
- 高橋啓 2007「徳島城下の盆踊り－『組踊り』と『ぞめき踊り』」『阿波踊り－歴史・文化・伝統 阿波踊りシンポジウム企画委員会編』第22回国民文化祭徳島市実行委員会事務局
- 徳島県教育委員会 2007「県指定無形民俗文化財 津田の盆踊り」『徳島の文化財』徳島県教育委員会発行：298
- 徳島市津田コミュニティ協議会広報部会 2011「津田コミュニティ協議会の歩み（コミュニティセンター10周年記念誌）」徳島市津田コミュニティ協議会発行
- 2012「津田の歴史・史跡めぐり」（徳島市「地域の力」まちづくり支援事業）徳島市津田コミュニティ協議会発行
- 徳島出版株式会社 1992「徳島グラフ」徳島出版株式会社

映像

- 四国放送 DVD「阿波踊り 華」発行年記載なし
- 徳島観光協会 DVD「熱波阿波踊り」発行年記載なし
- 徳島空港 DVD 2010「阿波おどり」